

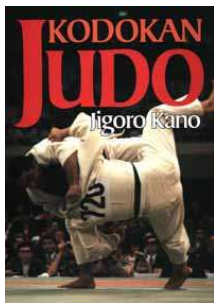
2008, 10, 10

世界が尊敬した日本人(34)

柔道を世界的なスポーツにした嘉納治五郎

前坂 俊之

(静岡県立大学国際関係学部教授)

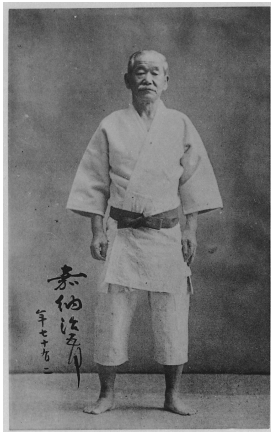


国技の大相撲がスキャンダルまみれで、人気低迷しているのと比べ、柔道はいち早く国際化し世界中に『JUDO』として普及した。

特にフランスでは、サッカーやテニスに次ぐ人気で競技人口は約56万人にもものぼり、本場日本の約3倍。小さな町にも柔道クラブがあり、多くの子供が「レイ」「ハジメ」「マッタ」など日本語で稽古をし、「カノウジゴロウ」はフランスで最も有名な日本人となっている。

嘉納治五郎は、1860(万延1)年10月、神戸市東灘区御影町の酒造家に生まれた。

開成学校(東大の前身)に進み、哲学、政治学を専攻した。嘉納は背が低く生来、虚弱な体質で、学校ではいじめられ、コンプレックスを抱いていた。これを克服して強い体を作りた



いと柔術の門をたたいた。各流派のワザの長所を取り入れ、『柔よく剛を制す』『小よく大を制す』の武術を創造する一方、勝負、体育、修身の3つが習得できる科学的なスポーツとしての柔道を完成した。

明治15(1882)年、東京下谷稲荷町に「精力善用」「自他共栄」をスローガンにした『嘉納塾講道館』を開いた。入門第2号は、小説『姿三四郎』の作者、富田常雄の父・富田常次郎七段である。

講道館柔道は柔術各流派と他流試合を行い圧倒的な強さを発揮、警視庁や軍隊、大学などに導入され日本全国に普及していった。嘉納は弟子たちを欧米に派遣して、柔道の海外普及にも努めた。

明治35年、山下義韶八段がルーズベルト米大統領からホワイトハウスに招かれ、2倍もの大男のレスラーと対戦し一発で投げ倒した。強い柔道にほれ込んだ大統領は早速、弟子

入りしたという。世界各地で異種格闘技戦を転戦し、生涯1千勝以上という無敗記録を達成したという『不敗伝説の男』前田光世四段もこの海外派遣組みの1人であった。

柔道の海外普及は日露戦争前後の世界的な高まり「ジャポニスム」と一体になっていた。フランスを中心に、日本美術への関心から始まった「ジャポニスム」は日本独自の文化へ、日本人の強さの秘密としての柔道に波及した。

当時まだ女性誌でなかった米大衆雑誌『コスモポリタン』も明治 38(1905)年5月号で「柔道」を大きく取り上げているほどだ。

<舌の写真は嘉納[右]、三船久蔵[左]>



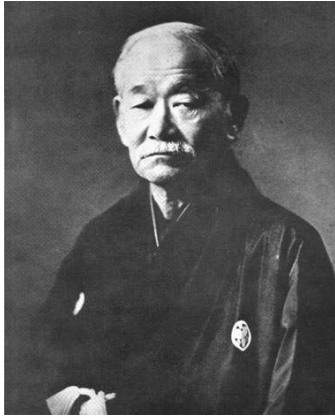
もともと嘉納は柔道家と同時に、教育指導者であり五高(現熊本大)、一高(現東大教養学部)、東京高等師範(現筑波大)などの校長を歴任し、教育、スポーツの普及に尽力した明治期を代表する国際人であった。

そんな嘉納を見込んで明治 42(1909)年、近代オリンピックの父・クーベルタンから「アジアのオリンピックの普及のためIOC委員に就任してほしい」と要請があり、IOCで初のアジア委員に選ばれた。

当時はオリンピックといっても誰も知らず、スポーツもまだ黎明期の時代。嘉納はスポーツの盛んな東大、早慶明など各大学に呼びかけて大日本体育協会を設立して会長となり、オリンピック参加を準備した。

1912年のストックホルム大会にマラソンの金栗四三、陸上短距離の三島弥彦の2人を派遣し、自ら選手団長として堂々と入場した。この時、プラカードの国名は最初は「JAPAN」となっていたが、大会直前に嘉納が主張したため、「NIPPON」に変えられたという。

昭和 11(1936)年のIOC総会(カイロ)で嘉納は東京開催をヘルシンキと競って勝ち、昭和15(1940)年に第12回大会を東京に招致することが決まった。



しかし、昭和 13 年(1938)5 月、嘉納は IOC 会議から帰国途中の氷川丸で肺炎により 77 歳で帰らぬ人となり、第 2 次世界大戦の勃発で、昭和 15 年の東京大会も幻のオリンピックに終わった。

嘉納が柔道を創始して約 80 年。昭和 39(1964)年 10 月、東京オリンピックが開催され、柔道が正式種目に採用となり、嘉納の長年の夢がかなって今や国際スポーツ『JUDO』として、世界の人気を集めている。